

※発言をそのまま書き起こしたデータを基に、個人情報に関する部分を削除し、文意が通るように修正を行っています。

【プロジェクトの成果報告】

3. コミュニケーション・フィールド「フォーラム」の効果

竹中一真（パブリック・アウトリーチ／東京大学）

（司会） 引き続き、「コミュニケーション・フィールド『フォーラム』の効果」を、NPO 法人パブリック・アウトリーチ、竹中一真よりご紹介いたします。

（竹中） それでは、フォーラムの効果について、パブリック・アウトリーチの竹中からお話しさせていただきたいと思います。

先ほど、土田先生から、アンケート調査を基にした定量的な分析において、フォーラム参加者がどのように変化したか、というお話をいただいたわけですが、私からは定性的なお話をしたいと思います。全 5 回のフォーラム終了後、フォーラム参加者の皆様にインタビューを行っています。このインタビューの結果を基に、フォーラム参加者がフォーラムの中でどのように変化したのか、その変化のきっかけはどういうものだったのか、というお話をさせていただきたいと思います。

フォーラムが目指すもの

〔仮説〕 お互いが何らかの思い込みをして、お互いの考え方にギャップが広がった結果、コミュニケーションの不全と不信の悪循環を招いているのではないか。

- 「原子カムラ」という言葉は、相手への思い込みを顕著に表している言葉かもしれない。



〔目的〕 「フォーラム」での対話を通じて、市民と専門家が、お互いを尊重し、コミュニケーションできるようになることを目指す。

まず、フォーラムの目的をもう一度確認しておきたいと思います。

「フォーラム」での対話を通じて、市民と専門家が、お互いを尊重し、コミュニケーションできるようになることを目指す、ということになります。

コミュニケーションできるように なるまでのプロセス

お互いに理解し、尊重する

- **お互いが異なることを知る**：お互いの普段の考え方や人柄などを知ることによって意見や判断、価値観が異なるものであることに気づく
- **共通点を知る**：お互いの中に共通点があることに気づく
- **異なることをあるがままに受け入れる**：個人個人で判断や価値観が異なるものであるということを「そういうものだ」とあるがままに受け入れる

お互いが変わろうとして、コミュニケーションする

- **自分が変わってもよいと思う**：自分と相手が歩み寄るために、自分が意見や判断、価値観を変えてもよいと思う
- **相手が変わろうとしていることを知る**：自分と相手が歩み寄るために、相手が意見や判断、価値観を変えてもよいと思っていることに気づく

さて、第1期のフォーラムを通して、参加者の方が「コミュニケーションできるようになる」までには、このスライドに示しているようなステップをたどっているのではないかと、ということが分かってきました。第1期でこのようなプロセスが確認されたので、第2期では、参加者の皆さんに、こういうことを意識してくださいとお伝えした上で、グループワークに入っていました。

「コミュニケーションできるようになるまでのプロセス」には、大きく分けて2つの段階があります。1つ目が、「お互いに理解し、尊重する」という段階。2つ目が、「お互いが変わろうとして、コミュニケーションする」という段階です。

それぞれの具体的な中身を見ていきたいと思います。まず、「お互いに理解し、尊重する」の中には、「お互いが異なることを知る」というステップがあります。お互いの普段の考え方や人柄などを知ることによって、人によって意見や判断、価値観が異なるということに気づく、という段階です。

一方で、その価値観や意見が同じところもたくさんあるということに気づいていく、というのが2つ目のステップです。

こうしたことに気づいた上で、「異なることをあるがままに受け入れる」、つまり、異なっているのが当たり前ののだと思う、という段階に進んでいきます。

「お互いに理解し、尊重する」を達成した後に、「お互いが変わろうとして、コミュニケーションする」というプロセスに移っていきます。ここでは、自分と相手が歩み寄るために、「自分」が意見や判断、価値観を変えてもいいと思いつつ対話をする、という「自分」

側の姿勢。さらには、「相手」も変わってもいいと思いながら対話しているということに気づく、という「相手」側の姿勢。こうした2つのプロセスが挙げられます。

フォーラムの中で、このようなプロセスが確認されましたので、私の発表では、このプロセスに沿って、参加者がどのような変化を感じているのか、そのきっかけが何だったのか、ということをお話ししたいと思います。

4

フォーラム前のお互いのイメージ

<ul style="list-style-type: none"> □ 市民の専門家に対するイメージ ● <u>パツと想像した人</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 学者や先生、東電の人 ● <u>市民に対する専門家の振る舞い</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 難しいことを言う ➢ 市民を見下ろす ➢ 話がかみ合わない ➢ 本音を話さない ➢ 市民の方を向いていない 市民の考えを分かっていない ● <u>どういう性質を持っているのか</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 無責任、信念がない ➢ 閉鎖的、情報隠蔽 ➢ 暗い、気難しい □ <u>その他、聞かれたイメージ</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 専門知識、誇りをもっている 	<ul style="list-style-type: none"> □ 専門家の市民に対するイメージ ● <u>パツと想像した人</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 反対派の人、デモ隊 ● <u>専門家に対する市民の振る舞い</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 嫌われている、犯罪者呼ばわりされる、糾弾される ➢ 議論は成り立たない、話しても理解されない ➢ 専門家に要望がある ● <u>どういう性質を持っているのか</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 原子力に対して不安・不信 ➢ 原子力に関し何も知らない ➢ 再生可能エネルギーに期待 □ <u>その他、聞かれたイメージ</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 無関心 ➢ 関心を持っている人も多い
--	---

まず、フォーラムに参加する前の時点で、専門家と市民の参加者の方々が、お互いにどんなイメージを持っていたのか、ということをごちらのスライドにまとめています。

「市民」が、専門家と聞いたときに最初に思い浮かぶのは、テレビで見るような学者や先生の方。あるいは東電の方。そして、イメージとしては、難しいことを言う、市民を見下しているのではないかと、市民の考えを分かっていない、無責任で気難しい、などが挙げられました。

一方で、「専門家」は市民に対してどういうイメージを持っているかというと、パツと思いき浮かぶ人は、反対派の人や、デモをしている人。なので、嫌われているのではないかと、議論がそもそも成り立たないのではないかと、市民は原子力に対して不安や不信を持っているし、原子力に関しても知識がない、というようなイメージを持っていたようです。

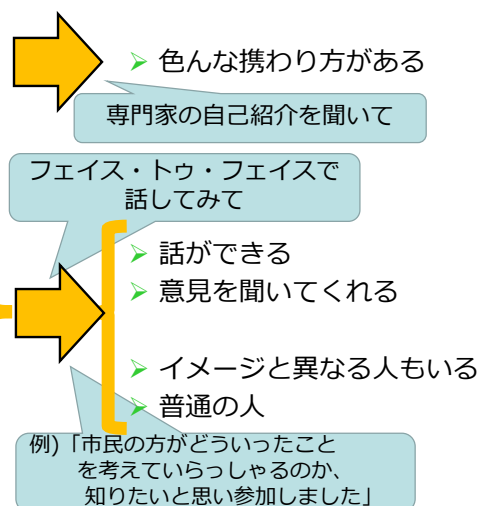
点線より下には、少し例外的なイメージを挙げています。例えば、専門家というのは専門知識を持っている人だ、市民の中には関心を持っている人も多い、市民は基本的に無関心な人たちだ、というような意見も聞かれました。しかし、基本的には、点線より上に書いてあるようなイメージを持って参加された方が多かったということになります。

1. 思い込みや先入観の解消（市民）

□ 市民の専門家に対するイメージ

- パツと想像した人
 - 学者や先生、東電の人
- 市民に対する専門家の振る舞い
 - 難しいことを言う
 - 市民を見下ろす
 - 話がかみ合わない
 - 本音を話さない
 - 市民の方を向いていない
 - 市民の考えを分かっているのか
- どういう性質を持っているのか
 - 無責任、信念がない
 - 閉鎖的、情報隠蔽
 - 暗い、気難しい

□ フォーラム開始直後から見られる変化

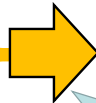


こうしたイメージは、ある意味「思い込み」であることが多く、参加者に最初に見られる変化は、こういった思い込みや先入観の解消になります。

どの時点で思い込みや先入観の解消が起こるかという点、最初の最初です。第1回フォーラムの冒頭に、フォーラム参加者の皆さんに自己紹介をしていただくわけですが、実はこの時点で思い込みや先入観の解消が少しずつ始まっています。

まずは、市民側の例を見てみます。例えば、専門家が自己紹介の中で、「私はこういう職場で務めていて」というような話をする。聞いたことのない会社だけれども、自分がパツと想像した専門家像とはまったく違って、いろいろな人がいるのだなということに気づく。さらには、面と向かって話してみても、なぜフォーラムに参加したのかという動機を聞くと、「市民の方がどういったことを考えていらっしゃるのかを知りたいと思い、参加しました」と言う。このような専門家の言葉を聞いて、イメージと違うな、話ができるのではないか。いい意味で「普通の人」だな。このようなことを、市民の方は、自己紹介の段階で気づいていた、ということになります。

1. 思い込みや先入観の解消（専門家）

- | | | |
|---|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> □ 専門家の市民に対するイメージ ● <u>パツと想像した人</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 反対派の人、デモ隊 ● <u>専門家に対する市民の振る舞い</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 嫌われている、犯罪者呼ばわりされる、糾弾される ➢ 議論は成り立たない、話しても理解されない ➢ 専門家に要望がある ● <u>どういう性質を持っているのか</u> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 原子力に対して不安・不信 ➢ 原子力に関し何も知らない ➢ 再生可能エネルギーに期待 □ その他、聞かれたイメージ <ul style="list-style-type: none"> ➢ 無関心 |  | <ul style="list-style-type: none"> □ フォーラム開始直後から見られる変化 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 話し合うことができる。 ➢ 市民から糾弾されない。 |
|---|---|---|
- フェイス・トゥ・フェイスで話してみて

専門家の場合も、同じように自己紹介の段階で変化が起きています。面と向かって話してみることで、ちゃんと議論ができそうだ、あるいは、思ったよりも市民から糾弾されないのだな、ということに気づくということになります。

2. お互いに理解し、尊重する(市民)

- 専門家にも色々な人がいて、色々な考えがある。専門家を一様に捉えるのではなく、1人の人として見ようとする。
- 共通点を知る
 - 専門家も同じ意見や同じ問題意識を持っていると気づく。
 - 専門家の市民（人間）としての側面に気づく。
 - 例) ・主婦でもある専門家が話した、息子(娘)の健康に関する不安。
 - ・専門家のサラリーマンとしての姿。
 - ・専門家の苦勞・苦惱、特に、福島事故を受けてのもの。
 - ・原子力以外の話題を話してみても（フォーラムの休憩中など）
- お互いが異なることを知る
 - 専門家と違う意見や考え方の部分がある。特に、
 - ・安全の捉え方、不安の感じ方、原子力を肯定から入る態度。
 - ・論理や定義、正確に話すことにこだわる、専門用語を用いる。

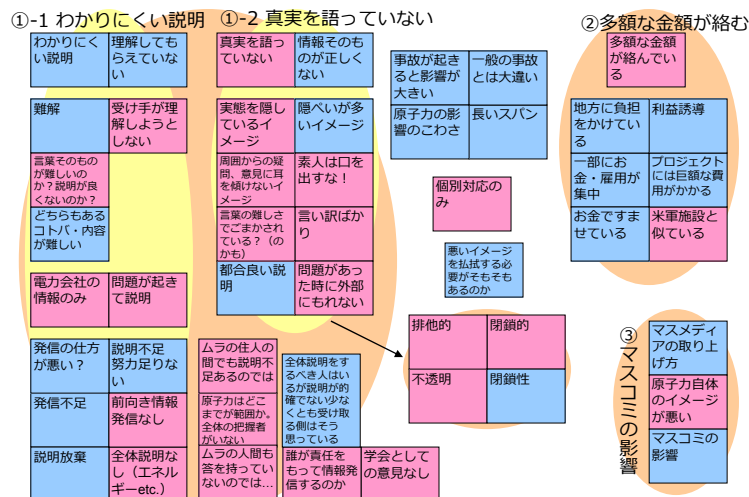
こうして思い込みが解消して、フォーラムの中で対話を重ねていくわけですが、次に、「お互いに理解し、尊重する」という変化が、市民、専門家共に見られます。

まずは市民側の変化です。専門家にもいろいろな人がいて、いろいろな考え方を持っている。そうした中で、専門家を一様に捉えるというよりも、むしろ1人の人として見ていくべきだ、ということに市民の方は気づいていくということです。

こうした気づきは、具体的には「共通点を知る」「お互いが異なることを知る」という2つのステップを経て起こっていきます。

まず、「共通点を知る」の中身は大きく分けて2つあります。1つは、専門家も自分と同じ意見や同じ問題意識を持っていると気づく、ということです。

なぜ原子カムラはなんとなくよいイメージを持たれないのか？（第1期, 第2回, C班）



<http://www.ponpo.jp/forum/forum.html>

「自分と同じ意見や同じ問題意識を持っている」ということに、具体的にはどのような場面で気づいたのかということ、グループワークの中で気づいたということになります。こちらは、第1期の第2回フォーラムの模造紙をデジタル化したものです。このときのテーマは、「なぜ原子カムラはなんとなくよいイメージを持たれないのか？」というものでした。

このテーマに対して、市民の方、専門家の方が、それぞれ自分の思うことを附箋に書いて貼っていきました。市民の方は赤い附箋に、専門家の方は青い附箋に自分の意見を書いてももらいました。その後、出てきた意見を、皆で場所を変えて可視化していくわけですが、見ていただければ分かるように、青と赤の附箋が混在しています。こうした中で、市民と専門家が同じ意見を持っているところがたくさんあるじゃないか、ということに、専門家も市民も気づいていったということになります。

フォーラム各回のテーマ

	第1期	第2期
第1回	2013年5月25日（土）13:00～17:00 「原子カムラ」とはなんだろうか？	2014年5月31日（土）13:00～17:00 「原子カムラ」とはなんだろうか？
第2回	2013年6月8日（土）13:00～16:30 なぜ、原子カムラはなんとなく良いイメージを持たれないのか？そのイメージを払拭するには、どうしたら良いだろうか？	2014年6月14日（土）13:00～16:30 市民と専門家が考える壁の違いとは？
第3回	2013年6月22日（土）13:00～16:30 原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？ 無関心は本当にダメなのか？ 原子力への関心」とはそもそも何なのか？	2014年6月28日（土）13:00～16:30 壁を越えるために何をどう伝えるべきなのか？ 市民がわかりやすい原子力情報とは？
第4回	2013年7月6日（土）13:00～16:30 原子力は本当に安全か？ 原子力は本当に必要か？ 原子力はやめることができるのか？ エネルギーの中の原子力の位置づけは？	2014年7月12日（土）13:00～16:30 原発は本当に必要なものなのか？ 原子力発電所なしで電力は「本当に」足りるのか？
第5回	2013年7月20日（土）13:00～16:30 もう一度考えよう・・・「原子カムラ」はあるのか、ないのか、何なのか？「原子カムラ」というものをどうしたらよいか？	2014年7月26日（土）13:00～16:30 地球温暖化と私たちの暮らしの関わりとは？

このようなフォーラムを、5回を1つのシリーズとして、2年間で2シリーズ実施してきました。このスライドには日時とテーマがまとめてありますが、細かいですので、詳しい情報はパブリック・アウトリーチのホームページで見ただけであればと思います。本当にいろいろなテーマでやってきたわけですが、どの回のテーマでも、やはり青色と赤色の付箋は混ざっているわけです。つまり、全5回を通じて、参加者の方は「同じ意見や同じ問題意識を持っている」と感じていったということになります。

2. お互いに理解し、尊重する(市民)

- 専門家にも色々な人がいて、色々な考えがある。専門家を一様に捉えるのではなく、1人の人として見ようとする。
- 共通点を知る
 - 専門家も同じ意見や同じ問題意識を持っていると気づく。
 - 専門家の市民（人間）としての側面に気づく。
 - 例) ・主婦でもある専門家が話した、息子(娘)の健康に関する不安。
 - ・専門家のサラリーマンとしての姿。
 - ・専門家の苦勞・苦惱、特に、福島事故を受けてのもの。
 - ・原子力以外の話題を話してみても（フォーラムの休憩中など）
- お互いが異なることを知る
 - 専門家と違う意見や考え方の部分がある。特に、
 - ・安全の捉え方、不安の感じ方、原子力を肯定から入る態度。
 - ・論理や定義、正確に話すことにこだわる、専門用語を用いる。

さて、前のスライドに戻ります。「共通点を知る」のもう 1 つの中身は、「専門家も同じ人間だという側面に気づく」というものです。

例えば、専門家でもあるけれども主婦でもあるという方が、息子や娘の健康に関する不安の話をされたとき。あるいは、専門家のサラリーマンとしての姿を見たとき。専門家の苦勞や苦惱を見たとき。原子力以外の話をしてみたとき。市民は、専門家と同じような不安を持っているわけではありません。けれども、専門家も市民と同じように「不安を感じる」のだな、同じように「苦勞している」のだな、ということ、市民の方が感じたということになります。

一方で、専門家と市民には違うところもある、ということにも気づいていきます。特に違いを感じるのは、安全の捉え方や不安の感じ方。原子力肯定から入る態度。あるいは、専門家の論理や定義、正確に話すことにこだわる姿勢。専門用語を多用する姿。市民の方は、こういうところは専門家と市民で違うのだなと感じるということです。

2. お互いに理解し、尊重する(専門家)

- 市民にも色々な人がいて、色々な考えがある。
 - 市民の中には話せば理解してくれる、考えを変える人もいる、という意味で色々な人がいる、という専門家も見られた。
 - 共通点を知る
 - 市民も同じ意見や同じ問題意識を持っている。
 - お互いが異なることを知る
 - 専門家と違う意見や考え方の部分がある。特に、
 - ・安全の捉え方、不安の感じ方。
 - ・原子力への関心や知識の度合い
- ※ 専門家からは、フォーラム参加者は市民の中でも意識の高い積極的な方、という捉え方も多く聞かれた。そのためか、市民を一様なものとして捉える傾向が変わらない専門家も見られた。

専門家と市民、という
構図を崩していない

次に、専門家がどのような場面で「お互いに理解し、尊重する」ようになったかについて述べたいと思います。

専門家も、市民にもいろいろな人がいて、いろいろな考え方があるということに気づいていきます。ただ、市民の中には話せば理解してくれる、考えを変える人もいる、という意味で、「いろいろな人がいる」とおっしゃった方もいました。つまり、自分が専門家としての立場で市民に対して説明したときに、市民の受け取り方にもいろいろあるのだなど。「説明する専門家とそれを聞いてくれる市民」という意味で、「いろいろな人がいる」というような意見も聞かれた、というのは、市民のケースと少し違う点になります。

「共通点を知る」に関しては、市民も同じ意見や同じ問題意識を持っている、という意見が専門家からも聞かれます。

「お互いが異なることを知る」については、安全の捉え方、不安の感じ方が専門家と市民でまったく異なっている、という意見が聞かれました。もうひとつは、当然と言えば当然なのですが、原子力への関心や知識の度合いが異なる、という意見です。想像していたよりも、市民は原子力への関心がない、知識が少ない、と感じられた専門家の方もいらっしゃったということです。

最後に、ポイントとして押さえておきたいのは、フォーラムに参加された市民の方は、市民全体の中でも原子力に対して関心があって、積極的な方なのではないか、という意見が専門家から聞かれたという点です。つまり、一般的な市民とは少し違う特殊な方たちが集まったのではないか、という意見です。ですから、フォーラムに参加された市民を見て、フォーラムに参加された専門家は、「いろいろな人がいる」ということを感じるわけですね。

れども、その思いを一般市民のほうまで適用していくかという、そういうわけではないという専門家の方もいらっしゃったということです。

11

お互いに理解し、尊重する ステップまでのまとめ

0. 《フォーラム前》お互いに思い込みがある状態

1. 思い込みや先入観の解消


2. お互いに理解し、尊重する

- お互いが異なることを知る
- 共通点を知る
- **異なることをあるがままに受け入れる（程度問題）**

例) 市民の声 ・ 専門家の立場を知ったら、考え方を理解できるようになった。
・ 知識を持つことで、専門家の意見の受け止め方が変わった。

専門家の声 ・ 市民の意見を受け入れられるようになった。
・ 市民は関心や知識を持たないといけないのではないか。

3回程度のフォーラムで、多くの参加者は一人の人としてお互いを見るようになる



3. お互いが変わろうとして、コミュニケーションする

ここまで、「お互いに理解し、尊重する」というステップまでのお話をしてきました。参加者の方のお話をお聞きすると、全5回のフォーラムのうち、3回程度でここまでのステップを達成しているように見て取れました。ここまでのステップを達成すると、今までは一様なものとして捉えていた市民、あるいは専門家のことを、1人1人の人間として見るようになるようになってきます。

こうしたステップを達成することによって、「異なることをあるがままに受け入れる」というコメントがちらほら聞かれるようになります。

例えば、市民からは、専門家の立場を知ったら、考え方が理解できるようになった。知識を持つことで、専門家の意見の受け止め方が変わった、という意見が聞かれます。

専門家からは、市民の意見を受け入れられるようになった、という意見が聞かれます。一方で、市民はもっと関心や知識を持たないといけないのではないか、という意見も聞かれます。ここでは「あるがままに受け入れる」と書いていますけれども、「あるがままに」というよりは、市民側に変化を求めるような専門家の方もいらっしゃったということです。

コミュニケーションできるようになるまでのプロセス

お互いに理解し、尊重する

- **お互いが異なることを知る**：お互いの普段の考え方や人柄などを知ることによって意見や判断、価値観が異なるものであることに気づく
- **共通点を知る**：お互いの中に共通点があることに気づく
- **異なることをあるがままに受け入れる**：個人個人で判断や価値観が異なるものであるということを「そういうものだ」とあるがままに受け入れる

お互いが変わろうとして、コミュニケーションする

- **自分が変わってもよいと思う**：自分と相手が歩み寄るために、自分が意見や判断、価値観を変えてもよいと思う
- **相手が変わろうとしていることを知る**：自分と相手が歩み寄るために、相手が意見や判断、価値観を変えてもよいと思っていることに気づく

ここからは「お互いが変わろうとして、コミュニケーションする」という次のステップについてお話ししたいと思います。このプロセスは、さらに分けると2つあり、1つは「自分が変わってもよいと思う」、もう1つは、「相手が変わろうとしていることを知る」になります。

では、具体的にどのように変わろうと思ったのか、相手がどのように変わろうとしているのを感じたのか、という話をここからしたいと思います。

3. お互いが変わろうとして、コミュニケーションする (市民) ¹³

□ 自分が変わっても良いと思う

- 原子力にもっと積極的に関わっていかなければいけない。専門家とコミュニケーション(伝える+聞く)をとっていかないといけないと思う。
- 専門家の考え方を理解できた、専門家の考え方を理解する方法を知った。

- 専門家が自分自身の考えや主張、価値観を述べるのを聞いて
- 専門家の悩んでいる点、苦労している点を聞いて

□ 相手(専門家)が変わろうとしていることを知る

- 市民の考えに専門家が共感の姿勢を見せてくれた。
- フォーラム当初は一方的な説明だったのが、市民の知りたいことを知ろうとし、それに答えようとしてくれた。
- 市民に分かりやすく説明しようという工夫がなされていった。
- 市民からの質問に対し、真剣に考え、悩んでいた。

まず、市民についてです。

1つ目は、原子力にもっと積極的に関わろう、専門家ともっとコミュニケーションを取っていかねばいけないと思った、いう変化です。2つ目は、専門家の考え方を理解できた、専門家の考え方を理解する方法を知った、というような、専門家に近づいていこうとする変化です。

一方で、相手(専門家)がどう変わろうとしていると感じているかという、市民の考えに専門家が共感の姿勢を見せてくれるようになってきた。あるいは、フォーラム当初は一方的な説明だったけれども、市民の知りたいことを知ろうとして、それに答えるようになった。あるいは、市民に分かりやすく説明しようという工夫がどんどんされてきた。市民からの質問に対し、真剣に考え、悩むようになってきた。このように、フォーラムを通して、専門家の市民に対する姿勢が真摯になってきて、どうやって説明するかということ専門家は考えてくれている、ということを市民は感じています。

続いて、市民がこのように変わろうと思ったきっかけについて述べたいと思います。

まず、「原子力にもっと積極的に関わっていかなければいけない」と思ったきっかけですが、1つ目は、専門家が変まって、真摯に市民に向かってきている。説明もどんどんうまくなってきて、市民に理解してもらおうとしている。こういう姿を見て、なるほど、専門家もコミュニケーションをすることによって変わるのか。これは自分たちとしても積極的に原子力に関わらないといけないし、専門家とコミュニケーションをとっていくことは大切だ、と市民は思うわけです。

「原子力にもっと積極的に関わっていかねばいけない」という変化に対しては、もう 1 つきっかけがあります。それは、この青い四角の部分です。専門家が自分自身の考えや主張、価値観を述べるのを聞いて。専門家の悩んでいる点、苦勞している点を聞いて。専門家のこのような話を聞ける場、機会は非常に貴重だということも含めて、原子力にもっと積極的に関わって、専門家と話さないといけない、話すことは大事だということに市民が気づく、というような構造になっています。

次に、「専門家の考え方を理解できた、専門家の考え方を理解する方法を知った」という市民の変化のきっかけについてです。この変化のきっかけも、こちらの青い四角の部分になります。専門家の考えや主張、価値観、あるいは悩んでいる点、苦勞している点を聞くことによって、今までよりももっと専門家の考え方を理解できた。だから、これからももっともっと専門家の考え方を理解していこうと思う、という流れです。このような変化が市民に見られました。

3. お互いが変わろうとして、コミュニケーションする（専門家）¹⁴

- 自分が変わっても良いと思う
 - 専門家として、市民に説明する努力をもっとしなければいけない。
 - 市民の知りたいことを聞く姿勢が大事だと思う。
 - 専門家として、自分の仕事によりきちんと取り組もうと感じた。
- 相手(市民)が変わろうとしていることを知る
 - 市民には、話せば理解してくれる人がいることを知る。
 - 市民の原子力に関する議論に取り組む真摯な姿勢を知る。

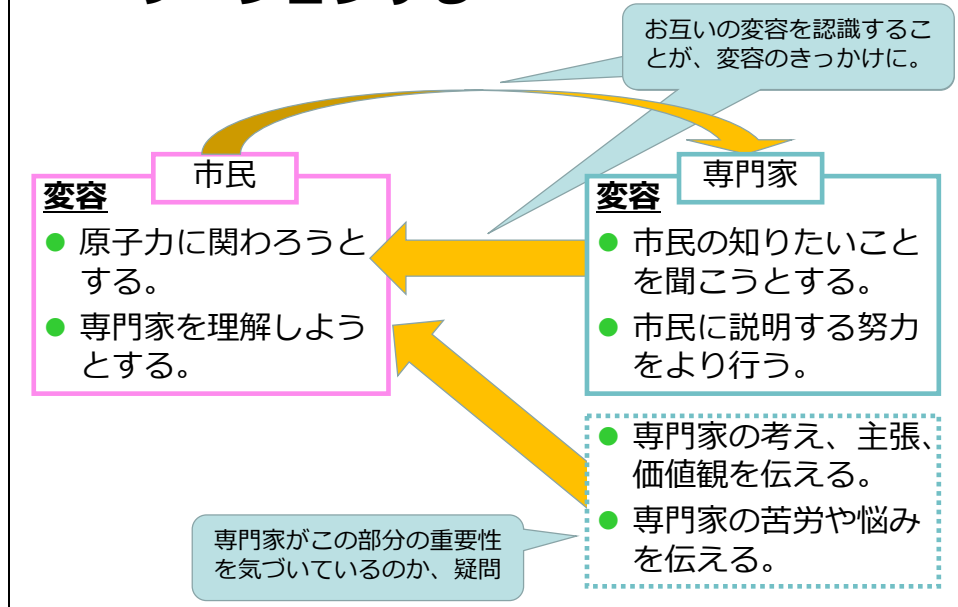
続いて、専門家の変化とそのきっかけについて述べたいと思います。

まず、専門家自身の変化ですが、専門家として、市民に説明する努力をもっとしなければいけない。市民の知りたいことを聞く姿勢が大事だ。これらは、市民が感じた専門家の変化とも対応しています。そして、自分の仕事に持ち帰って、しっかり責任を持って原子力に取り組まなければいけないと改めて感じた。このような変化が見られました。

では、専門家は、市民のどのようなところが変わっていると感じているかという、市民には、話せば理解してくれる人がいることを知った。つまり、こちらの説明に対して、知ろう、知ろうとしてくれる。あるいは、市民の原子力に関する議論に取り組む真摯な姿勢を感じた。つまり、先ほど言いましたように、市民は「原子力に積極的に取り組まなければいけない」と自分の気持ちを変化させていたわけですが、その変化に専門家は気づいた、ということになります。

専門家が変わろうと思ったきっかけになっているのは、市民の変化です。市民が真摯に取り組んで、原子力のことを理解しようとしている。こういった姿を見て、専門家も、自分たちもそのために何かできることはないのか、ということで、自分たちの変化につながっていく。このような構造になっています。

3. お互いが変わろうとして、コミュニケーションする 15



今、市民と専門家に分けて、「お互いが変わろうとして、コミュニケーションする」という話をしたわけですがけれども、両者の相互関係を少しまとめたいと思います。

まず、市民の変容は、「原子力に積極的に関わろうとする」とことと、「専門家を理解しようとする」とことでした。

このような市民の変化を見た専門家には、市民の知りたいことを聞こうとする、あるいは、市民にもっと分かりやすい説明をするためにはどうすればいいのか考える、という変化が表れてきます。

逆に、専門家の変化を見て、市民は、原子力にもっと積極的に関わろうとするわけです。ただし、先ほど言いましたように、「専門家を理解しようとする」という変化は、「市民の知りたいことを聞こうとする」「市民に説明する努力をより行う」がきっかけではありません。それについては後ほど述べますが、今言ったように、相手の変容を認識することが自分の変容につながる。市民は、専門家が変まっているから、自分たちも変わろうと思う。専門家は、市民がそうやって変わったのを見て、また自分たち変わらなければいけないと思う。このようにお互いが変わっていく様子が見られます。

さて、市民の「専門家を理解しようとする」という変化は、先ほど言いましたように、専門家の考え、主張、価値観を伝えること、あるいは、専門家の苦労や悩みを伝えることがきっかけになっています。この2つは、実は市民の「原子力に関わろうとする」という変化にも影響を与えています。

ただ、「専門家の考え、主張、価値観を伝える」「専門家の苦労や悩みを伝える」は、点線で囲んでありますように、専門家自身がこの部分の重要性に気づいているかどうかには

疑問が残ります。というのも、専門家へのインタビューの中で、「こういうことが大事だということに気づきました」という話は、なかなか出てこなかったのです。さらに言うならば、専門家は、「こういうことを言うのは専門家としてはあるまじき姿だ、やってはいけない」と思っている可能性もあるのではないかと考えています。

さて、こちらの図は、お互いがお互いの変容にどのように影響を及ぼしているか、ということにフォーカスしているのですがこういう図になっているのですけれども、当然フォーラムには専門家の方がたくさんいらっしゃいますし、市民の方もたくさんいらっしゃいます。ですから、市民が市民の姿を見て変わることも、専門家が専門家の姿を見て変わることもあるわけです。

例えば、ある専門家が、他の専門家を見て、「あの人の説明の仕方はうまいな」と気づく。それを見て、自分も変わらなければいけないと思う、というような、専門家同士の変化もありました。それはもしかしたら反面教師の場合もあるかもしれません。

そのような専門家同士での変容、市民同士での変容もあるということを、ここで指摘しておきたいと思います。

話を聞いてもらえる専門家の要件

フォーラムのような試みを3回程度行い、

1. 思い込みや先入観の解消
2. お互いに理解し、尊重する

を達成した上で、以下の点に気をつける

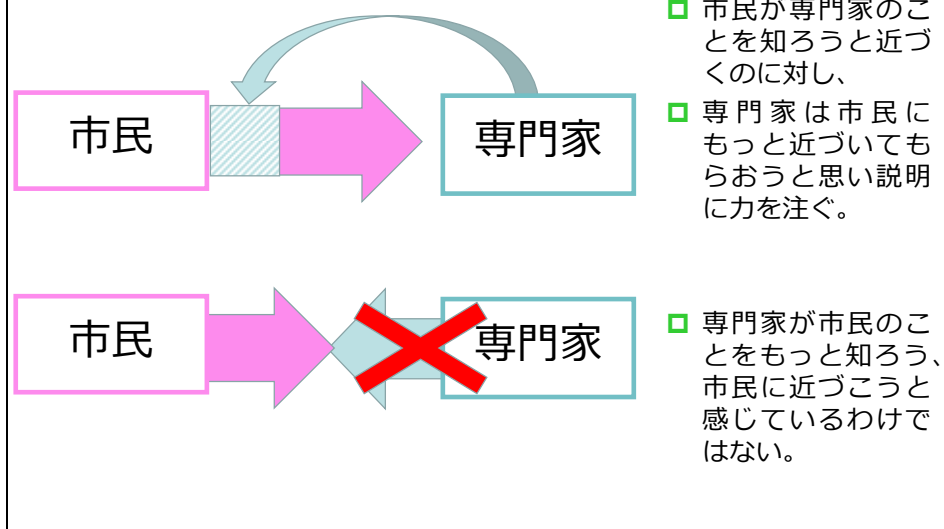
- 市民の知りたいことを知ろうとし、それに答えようとする。
- 市民に分かりやすいように説明する。
- 市民の考えに共感できるところは、その意を示す。
- 専門家として答えが出ない部分について、その悩みや苦勞を伝える。
- 専門家としてではなく、個人としての考えや主張、価値観を伝える。

さて、今、専門家の考えや主張、価値観を伝えること、あるいは苦勞や悩みを伝えることが重要だという話をしましたが、では初対面の市民の方にいきなりそういう話をして、うまく効果を発揮するかというと、そうではないと思います。

今回の場合は、3回程度のフォーラムを通じて、思い込みや先入観を解消するステップ、「お互いに理解し、尊重する」というステップを経ていきます。こうしたステップを達成することで、初めて市民は、専門家を1人の人間として見ることができるようになります。1人の人間として見た後に、専門家の苦勞、あるいは自分の価値観を伝えるということが非常に効いてくる、ということになります。

その上で、専門家に求められる要件をまとめてみました。1つ目は、市民の知りたいことを知ろうとし、それに答えようとする。2つ目は、市民に分かりやすいように説明しようとする。3つ目は、市民の考えに共感できるところは、その意を示すこと。4つ目は、専門家として答えが出ない部分については、その悩みや苦勞を伝えること。そして、専門家としてというよりも、個人としての考え、主張、価値観を伝えること。話を聞いてもらえる、つまり市民の方が「自分が変わってもいい」と思えるためには、専門家にはこういうことが必要だということをごここでまとめています。

変容の非対称性



最後に、「変容の非対称性」と書いています。今まで、専門家と市民は両方とも変わってきました、というお話をしました。では、そのお互いの変わり方が同じかというと、実は少し違うということをここで書いています。

市民は、原子力に対してもっと関わろう、あるいは専門家のことをもっと知ろう、というように、専門家に近づこうとする変化をしています。

それに対して、専門家は、市民にもっと説明しよう、あるいは積極的に原子力に関わってもらおう、もっと理解してもらおう、というように、市民に専門家に近づいてもらおうとはたらかかけています。つまり、専門家が市民のことを知ろうとする、あるいは市民に近づいていこうという動きをしているわけではありません。

このように、実はお互いの変容は非対称的なものであるということを最後に指摘して、私の発表を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

(司会) 竹中さん、どうもありがとうございました。今の報告について、ご意見などがおありの場合は、青い紙にお書きください。